
あの子はNEET使い

あきのあかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの子はNEET使い

【ZETE】

N4499BA

【作者名】

あきのあかね

【あらすじ】

高校を中退して2年の月日が経ったある日の事、中城靖也は今日も何もしないで暮らしていた。そんな時、突如やって来た自称NEET使いの謎の女に「お前は私のNEETになれ!」と言われる。

ZEEETは来客に弱い

ZEEETとは職を持たず、働く意志も無い。それらしい理由をつけ、家族を騙してでも働く事から逃げ続ける。

そのくせ、部屋に閉じこもって電気を使い、便所に行けば水を使い、空気を吸つて二酸化炭素を排出し、働くない癖に口だけは一人前。このため、「働く者食うべからず」を美德としている世間では人間のクズとして扱われる。

某情報サイトより抜粋。

ZEEET、そう。

それは、選ばれなくてもなれる勇者。

世間からは蔑むように見られ、同情され、またある時は羨望されるべく存在。

まるで物置のような、四畳半の狭い畳の部屋に俺はいた。

俺、中城 靖也はZEEETであった。

……ZEEETであるがゆえに、孤高であった…………。

高校を中退してから2年、社会という闘と戦う元・我が同胞は今年で18歳になるらしい。

元氣にしてるだろうか？

何もかもが面倒になつた俺は光の速さで高校を中退し、毎日インターネットと漫画を読み漁る。

両親は呆れて何も言わず、こうして親にも見捨てられた俺は、雲を見て時間の流れを知るという特技を会得した。

「もつ昼か……

そして起きる時間は決まって毎過ぎ。

「今日もお気に入りのお宝画像でも探すとするか……」

毎日のライフワーク。

俺の仕事はコレ、だから俺はNEETなんかじゃない。

ピンポーン

チャイムが鳴った。

……誰も出る様子がないな。

1階で物音がしないという事は家族はないのだろうか?

今日は何曜日だ?

「水曜日かよ」

一体何回目の水曜日かなんてのは知ったこっちゃないが、親父は出

勤、母ちゃんはパート、妹は……学校じゃん。

でも気にしない、百戦錬磨の俺は居留守も使ってしまう。
蛇もぬけの殻だと落胆して帰つていぐがいい、悪徳セールスマン。

「ふつ……負けを知りたい…………」

ネットで良く見る用語をとりあえず呟き、余韻に浸る。

ピンポーン

「何……だと?」

かなり相手も頑固だな。

そこにはいると疑わない、その搖ぎ無き信念……立派だ。

「だが、屈しない! テロには屈しない!」

ピンポーン

「……」

ピンポーン。ピンポーン。ピンポーン

連打!?

しかも、そのチャイムは秒間1~6連打を記録しそうな勢いだ。

気になつた俺は、恐る恐る玄関へと近づいた。

ガチャガチャ

ドアノブを捻つてゐる。

空き巣か？

高鳴る心臓を抑えて扉の向いつの景色を覗いつとして
バキイイ

と「う音と共に扉」と後ろに吹き飛ばされた。

「うわっ！？」

扉は無理矢理抉じ開けられていて、修復は無理そうだ。
その扉を壊した相手だけでも確認しなければいけない。
それが自宅警備を任せられる俺の宿命だった。

「お前は中城靖也だな？ 私は久遠音子 くじねおとねこ N E E T 使いだ」

とんでもなく可愛い女の子が、扉をぶつ壊して、虫を見るような目
でボクを見てきます。

「お前は私のN E E Tになれ！」

俺の知らない間に随分と社会は変わったなあ。

ZEE-Tは突然に弱い

.....。

よれよれのTシャツに短パン。

今年18歳になる俺は、そんな格好で正座させられた。この狭い四畳半の空間に。

「何なの？ その生活観まる出しの馬鹿まる出しー もつお前は『まる出し』って呼ぶ」とするぞー。」

突然の訪問者は、我が家の門をぶち壊すだけじゃ物足りず、あらう事が俺に説教を始めていた。

「あの……」

「黙れ、まる出しー！」

よくわからないこの腕章を付けて、ポニー・テールの似合ひの子が、俺をまる出しだと言つ。

その後、俺は襟首を掴まれて、引きずり出されるよつて血腫へと案内された。

そう、案内された……俺の部屋なのに……。

「あ、あの」

俺は事態の説明を願うべく、声を張りてこの女に質問をする事にした。

「黙れー！」

「まる出しにも話せてくれさいー！」

「よし、許すー！」

許可が出た。

「こきなり家に押し入ってきて、なんで俺は正座させられたんだよー。」

流石の俺も意味が分からなくてキレたぞー！

「二ートだからだ」

「あ、そうですよね」

随分と世間の風当たりが強くなつたな！ 二ート！

「他に質問はないか？ ないなら早速行くぞ」

「あ、あります！ あります！ 二ートの俺に質問させてください！」

「！」

「言つてみろ」

とてつもなく、威圧的な視線で俺を見る奇奇怪怪な不可解至極極まりない女。

「二ート使いって……何？」

さつき開口一番に聞いた、聞き慣れない言葉を聞いた。

二ート使い、二ートを使うというわけなのだから、二ートは働かなければならぬ、それに対しても二ートは働かない事を指す言葉のハズだ。

何やら根本的に決定的に致命的に矛盾が発生している気がするぞ。

「中々鋭いな。まる出し

まる出しじじゃねえよ！ どこも出してねえよ！

「二ート使い、それは二ートを使って仕事をする職業の事だ

そ、それはとても生産性があつて……！」

「以上だ」

非効率な話だつた。

「待て待て待て、何が『二ートを使って仕事をする職業の事だ』だよ！ 結局お前は働くねえじやん！」

「二ートを働くかのように働いている」「結局は何もしてないだろ！」

そんな職業があるハズないだろ！

横に置いてあるパソコンに検索をかけて、慌しくマウスを操作する。

【二ート使い養成学校】

あ、あつた。
ありました。

し、しかし仮に『あつても』だ。

「なんで俺なんだよ！ 他にいるだろ二ートなんて！」

「配られたプリントの中に、まる出しなお前がいたんだ」

そう言つて、折りたたまれたプリントを広げて突き出す二ート使い。

「顔写真しかねえだろ！どこも出してねえよー」

と言つた。

「なんで俺の個人情報がこんなに大々的にプリントアウトされてんだよー！」

頼む、誰か水分をくれ、突つ込み疲れてきた。

「そういう権力を持つている」

すげえな二ート使い。

「と、兎に角だ！ 俺はこの家から動かない。勝手に家に入つて俺の人生を滅茶苦茶にするな！ 俺はずつと何もしないで生きていくんだあああああー！」

どうだ？ 自分勝手で人間のクズだらう？ 自分で言つて若干変な汗が出るくらいの駄目人間つぶりだが、わあ、帰れよ。【頭がおかしい社会不適合者なう】って呴けよ。

ところが、そんな俺の想像を常に斜め右下70度曲がつて少し行った所を行く二ート使い。

「お前つて奴は……！ やつぱり私の目に狂いはなかつたぞーーーーーー！」

と抱きついてきた。

あの……胸が顔に当たつてます。

ZEEETは交渉に弱い（前書き）

すみません、大幅内容変更予定作品です。

ZEETは交渉に弱い

「ち、ちょっと待ってくれ！」

顔に当たる未知の感触をしばらく味わいたかったが、理性がすぐぶる働いているようで俺は後退りして離れる。

「意味がわからん！」

俺は今持ちえる最大の言語能力を発揮して、その気持ちを伝えた。
「何も臆する事はないぞ、ニート。社会はお前の思っているより楽しいものだ」

腰に手をあて、蔑むような視線を送り続ける女は、すっと手を差し伸べ優しく微笑んだ。

「一緒に来い」

しばらく家に引き籠もっていたという事もあり、こんな風に同じ年くらいの女の子と話すのは久しぶりな気がする。

「嫌だね、今更俺みたいなゴミが社会に出て歩いても恥を晒して生きていいくだけのようなものだろ」

胡坐あぐらを書いて、女の視線から逃れるようにソッポを向く。

「ふむ……」

女は少し考える仕草を取つて続けた。

「お前は何を糧に生きて、何の為に生きているんだ？」

「……毎日の墮落だよ。墮落が俺を停滞させるんだ、そして、その停滞を守るために生きている。ただそれだけ、別に生きていようが死んでいようが関係ない」

親に迷惑をかけて、家族に迷惑をかけて、俺はそれでも呑氣に生きているんだ。

「生きていようが死んでいようが同じ……か

哀れむような目で、優しく見つめられる。

胸が少しキュッと締め付けられた。

「な、なんだよ」

「だつたら、その有つても無くても変わらないお前という存在を私に貸してくれ」

「貸す？」

「お前がいれば、少なからず私だけは大いに助かる。単位も取れるし、信頼も得られるんだ」

「自分勝手だな」

「そうだ、自分勝手だ。それゆえに、お前には絶対に来てもいい。お前は誰かの為に生きてみるべきなんだ」

「誰かの……為？」

最後に誰かの為に何かをしようとしたのは何時頃だつたけ？未だに目の前の二ート使いは手を差し伸べている。この手を取つたら俺は変われるのだろうか。久しく忘れていた、人の感触を思い出した。

おっぱい。

下賤、下賤ぞ俺の思考回路。

「そのレンタル料は勿論払う」

少女は手を取れと言わんばかりに目の前まで差し伸べて、くいくい、と指を動かす。

「レンタル料？」

「ああ、私が愛してやう。お前みたいな……もう出しを

顔を赤らめて言つ台詞じやねえだろ！」

いや、赤らめるべき台詞なのかもしれないが、自分の捏造した事象で赤らめられても困る。

何度も言つが、どこも出してないからな。

しかし、俺の理性は断固たる決意を持っている。

そんな甘い誘惑に動搖はしない。

「愛すつて……い、一体全体な、何を言ひてるんだよ

動搖するのは仕方ねえだろ、ちくしょつ。

「そのままの意味だ。お前が今まで二ートをしてた期間に味わうべきだった青春を私が払つてやるといつのだ。つまり……んバツクノズルだな」

それはそれは、何処かで聞いたことのあるよつたネタを……。
しかし、それはとても魅力的な話だつた。

「了解した」

俺の二ートに対する執着心なんてこんなもんだつた。

「よし、交渉成立だな」

「いや、待て！ まずは一日体験だ。内容によつては俺は破棄する」
手を取つたその手は柔らかく、温かかった。

「いいだろう。絶対気に入つてくれると思つぞ学校は

……学校？

「先ずは入学手続きをしろ」

そういうつてもう一枚謎の紙を取り出して突き出す二ート使い。
ちよつと……。

「ちよつと待つたああああああああああああああああああああああ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4499ba/>

あの子はNEET使い

2012年1月14日19時54分発行